

<研究名称>

感音難聴者における聴力閾値と語音明瞭度の関係

<実施責任者及び実施担当者>

実施責任者 所 属 医療技術部 検査
職 名 技師長
氏 名 青木 晋爾

実施担当者 所 属 医療技術部 検査
職 名 神経生理検査係長
氏 名 大木 健一

実施担当者 所 属 耳鼻咽喉科部
職 名 第二耳鼻咽喉科部長
氏 名 長峯 正泰

<研究期間>

患者情報取得に電子カルテを開示する期間は倫理委員会承認後から2022年3月末までに終了する予定。情報収集内容は2013年1月から2021年3月の期間に終診した被検者で入院時、退院時、治療1か月後の標準純音検査、語音聴力検査データを取得する

<診療・研究の目的>

急性感音難聴は突発性難聴を始めとする急激に発症する感音難聴を総称した疾患である。聴覚検査には様々なものがあるが、急性感音難聴の診断の基本は純音聴力検査による気導聴力閾値および骨導聴力閾値の測定を行う。語音聴力検査は、検査音として語音を用いる聴覚機能検査である。人において聴覚の多くの役割は語音の聴取であり、音が聞こえるだけではなく、言葉を理解する必要がある。聴覚機能を評価するうえで人が発生した語音をどれ位聞き取ることができるか、その意味から語音聴力検査は純音聴力検査よりも聴こえを評価する上で重要な検査である。また両検査を検討した報告はあまり多くない。今回入院治療で音楽療法を終えた感難聴者を対象に治療前後の標準純音検査と語音聴力検査を後ろ向き研究に集計し両検査の関係について検討し発表したい。

<実施内容（方法）>

2013年1月～2021年3月間までに入院治療、検査等を終えた感音難聴者約100～400名を対象に後ろ向き研究にて、各個人の左右耳の標準純音検査と語音聴力検査について入院時、退院時、治療1か月後の左右聴力閾値差（dB）と最高語音明瞭度（%）の量的データを使用し、相関係数はピアソンを用いて両検査の相互関係を検討したい。

<危険性（副作用）等>

個人名やIDは記載せず、個人を特定できない方法で調査・集計するため、特に危険性などはないと考えられる。

<倫理上問題になると考えられる事項>

本研究は、2013年1月から2021年3月にかけて治療、終診した患者情報の取得に電子カルテを開示し検査データを用いた研究を行う。対象となる個人および家族等の関係者に危険は無く、不利益になる事はない。個人情報特定されないこと、知りえた情報やデータは本研究でしか使用しない。治療が終診しており被検者の同意取得は困難であるため、病院のウェブサイトにてオプトアウトし、研究が実施されることについて、研究対象者が拒否できる機会を保障する。

また一定期間、耳鼻科外来聴力検査室前にオプトアウトについての説明内容を掲示する。

<問い合わせ先>

当研究に自分の試料・情報利用を停止する場合等のお問い合わせ
〒070-8530

旭川市曙1条1丁目1番1号

旭川赤十字病院

医療技術部 検査

TEL 0166-22-8111

FAX 0166-24-4648